

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32102

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12778

研究課題名（和文）20世紀フランス哲学を背景とする後期レヴィナスの自己論に関する分析的研究

研究課題名（英文）Analytical study on Levinas's mature concept of ipseity in light of 20th-century French philosophy

研究代表者

平岡 紘（HIRAOKA, Hiroshi）

流通経済大学・流通情報学部・准教授

研究者番号：00823379

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、E・レヴィナスが1960年代以降に展開する、自分が他者から呼びかけられてしまっていることを根源的な自己性として提示する自己性論を、(A)自己性をめぐる後期レヴィナスの思索の体系的分析および(B)同時代フランスの哲学者たちとレヴィナスの思想的交流の実相の精査の二点を方法の柱として、(1)自己の「唯一性」、(2)自己への呼びかけの時間性としての「過去」、(3)自己性の音声的特徴づけ、以上三点について解明した。この研究を通じて、後期レヴィナスの自己論の内実を明らかにするとともに、20世紀フランス哲学における音声的事象をめぐる省察の進展について基礎的な展望を獲得した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来のレヴィナス研究において注目されてこなかった、レヴィナスが同時代のフランスの哲学者たち（M・デュフレンヌやJ・ドゥロムら）と思想的に相互交流しつつ自身の自己論を確立していったという点に着目し、レヴィナスだけでなく、これまで研究があまり進められてこなかったフランスの哲学者の思考についても検討を行い、20世紀フランス哲学の歴史に関して新たな知見をもたらすものである。また近年、LGBTQに全世界的な関心が向けられるなど「アイデンティティとはどのような事柄なのか」という問いが改めて重要性を増している。本研究の成果は、この問いに対して哲学的に思考するための基盤となる知見である。

研究成果の概要（英文）：In this study, I investigate Emmanuel Levinas's concept of ipseity, developed since the 1960s, which presents being called upon by the Other as a primordial ipseity. The study is based on two methodological pillars: (A) a systematic analysis of Levinas's mature reflections on ipseity, and (B) an examination of his intellectual exchanges with contemporary French philosophers. Through this approach, I elucidate three key points: (1) the "uniqueness" of the self, (2) the "past" as the temporality of being called upon, and (3) the phonetic characteristics of ipseity. Through this research, I succeeded in clarifying the details of Levinas's developed concept of ipseity and gained a foundational perspective on the development of reflections on phonetic phenomena in 20th-century French philosophy.

研究分野：哲学、倫理学

キーワード：レヴィナス フランス哲学 自己性 声

## 1. 研究開始当初の背景

近年 LGBTQ に全世界的な関心が向けられるなど、「アイデンティティとはどのような事柄なのか」という問いが改めて重要性を増している。日常用語における「アイデンティティ」は、20 世紀フランス哲学において「自己性 *ipséité*」の概念のもとで主題化されるが、自己性について独自の思索を練り上げた最も重要な哲学者の一人が、第二次大戦後フランス語圏において活躍したユダヤ人哲学者 E・レヴィナス（1906-1995）である。彼は、西洋哲学の伝統的な自己意識概念を特徴づける「自己への現前」のような、現在における自己同一化を自己への束縛と他者への無関心につながるものとして批判的にとらえ、より根源的な自己の次元が他者との関係において成り立つと論じる。とりわけ 1960 年代後半、いわゆる後期になると、レヴィナスは、私が自らを同一化するのに先立って、他ならぬ自分がつねにすでに他者から呼びかけられてしまっているということに最も根源的な自己性が存するというラディカルかつ特異な自己論を提示するに至る。

レヴィナスはこのような根源的自己を指示するために「対格の自己 *se*」という概念を提示し、その内実を特徴づけていく。その議論はおおむねフッサールやハイデガーの現象学の検討を通じて進められるが、しかしその議論展開の決定的な箇所では、フッサールやハイデガーではなく、同時期（1960～80 年代）に活躍し現象学の枠に収まらない独自の哲学を打ち立てたフランスの哲学者、例えば M・デュフレンヌ、J・ドゥロムらの思索が参照される。この二名それぞれについてレヴィナスは論文を公表しているほか、後年の対談でもしばしばこの二者（特にドゥロム）の名を挙げ、留保を示しつつも高く評価している。この二名の側もレヴィナスの思想への参照や重要なレヴィナス論の発表、さらには互いに著作への参照や主題的な論文執筆を行っている。このようにレヴィナスは、同時代のフランス哲学者らとの思想的相互交流の内にいたのであり、彼らの哲学との関係の中で自らの自己論を提示しようとしていたのである。しかしながら従来のレヴィナス研究では、こうした同時代の哲学者とレヴィナスの思想的対話の内実という点については十分な検討がなされてこなかった。

こうした状況を踏まえつつ研究代表者は、中期著作『全体性と無限』（1961）から後期にかけてのレヴィナスの諸テキストおよびデュフレンヌ、ドゥロムらの諸著作を読解する中で、これら哲学者とレヴィナスの思想的交流の実相を精査することによってこそ、「対格の自己」概念を核心とする後期レヴィナスの自己論の根本的特徴と内実を明らかにすることができるのではないかと、という仮説を立てるに至った。この仮説にもとづいて本研究は後期レヴィナスの自己論の内実を明らかにし、「アイデンティティとはどういうことか」という問いに一つの哲学的な応答を提示することを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究は、1960 年代後半以降にレヴィナスが展開する、他ならぬ自分がつねにすでに他者から呼びかけられてしまっていることを根源的な自己性として提示するラディカルな自己論をめぐって、同時代のフランス哲学者とレヴィナスの思想的交流の実相を精査することを通じて、その内実はいかなるものであるのか、それはどのような仕方でも練り上げられたのか、その真の独自性はいかなる点にあるのかを解明することを目的とする。

他方、本研究の検討対象となる 1960～80 年代に活躍したフランス哲学者たちは、レヴィナスが高く評価し当時のフランス哲学において大きな影響力を有していたにもかかわらず現在ではほとんど顧みられることがない。本研究はそうした哲学者たちの思索を改めて検討し、20 世紀フランス哲学の歴史に関する新たな知見をもたらすことも目的としている。

以上を通じて本研究は、「アイデンティティとはどのような事柄なのか」というアクチュアルな問いをめぐって哲学的に思索するための基盤となる知見を提示することを目指す。

## 3. 研究の方法

本研究は、上述の研究目的を達成するため、(A)自己性をめぐる後期レヴィナスのテキストを体系的に読解すること、(B)同時代フランスの哲学者たちとレヴィナスの思想的交流の実相を精査すること、この二点を方法上の柱として、以下の 3 点を主題としておおよそ年度ごとに研究を進めていった。

(1)他者の呼びかけがもたらす自己の「唯一性」：後期レヴィナスは、ハイデガー存在論においては主観性が存在の開示としての真理を見る自己意識として、真理の成立に必要な一契機に縮減されていると批判し、「対格の自己」は、こうした存在の開示に従属することのない「存在の彼方の一者」として唯一なる者であると論じる。こうした議論の内実を、デュフレンヌ『ア・プリアリオリの概念』（1959）やドゥロム『思考と現実』（1967）を検討しつつ考察した。

(2)他者の呼びかけと対格の自己の時間的特徴としての「記憶不可能な過去」：対格の自己は他

者の呼びかけの宛先として成り立つが、レヴィナスはこの呼びかけとその宛先たる自己を、自己意識的な現在に先行する「記憶不可能な過去」という時間的性格によって特徴づける。この時間的性格が、現在に対する先行性以上にいかなる内実を有するのかを、ドゥロムのベルクソン論『生と意識の生』(1954)やデュフレンヌ『ア・プリオリの概念』などを参照しつつ、レヴィナスがベルクソンの記憶理論をどのように理解しているかを検討しながら考察を行った。

(3)根源的自己性の音声的特徴づけ:「対格の自己」は他者からの呼びかけにおいて成立するが、レヴィナスはかかる自己性を記述していく際、音声的表現を多用する。すなわちハイデガー存在論における存在の開示は「沈黙の響き」であり、呼びかけられた「対格の自己」はこの響きのうちに響いている「それ自身のこだまのうちで響く音」であると記述し、レヴィナスは前者から後者へという道行きをたどる。こうした議論の内実を、デュフレンヌ『眼と耳』(1991)や、さらにJ・ロゴザンスキー『我と肉』(2006)、J-L・クレティアン『裸の声』(1990)、『呼び声と応答』(1992)など現代フランスの重要著作を検討しつつ考察した。

#### 4. 研究成果

当初は3年間の研究計画であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響がなお残っていたことおよび研究成果を論文として公表する目処が立ったことにより、研究期間を延長し合計4年間研究を行った。考察主題のそれぞれに関して、成果は以下の通りである。

(1)自己の「唯一性」:『全体性と無限』から後期主著『存在の彼方へ』(1974)の間に発表されたレヴィナスのテキスト、とくにデュフレンヌ『ア・プリオリの概念』の書評論文「ア・プリオリと主観性」(1962)を重点的に精査することにより、デュフレンヌが、存在の開示としての真理に従属することのない主観性のあり方を、主観性に属するア・プリオリな次元、すなわち存在者が現れてくる際のさまざまな意味を読み取る能力(たとえば身体性)に見出そうとするのに対して、レヴィナスはこうした主観性のア・プリオリな能力はなおも存在の開示に従属しているとみなし、他者からの呼びかけに対する自己の受動性を強調しているという点を明らかにした。この研究を進めていく中で、レヴィナスが提示する自己性が、絶対的内在によって特徴づけられるM・アンリの自己性に近づくことに思い至り、アンリに影響を受けつつ「名」に着目した独自の自己論を展開しているロゴザンスキーの所論を検討しつつ(私)の唯一性について考察した学術論文を哲学系一般誌『ひとおもい』に発表した。

(2)「記憶不可能な過去」の内実:近年のベルクソン研究を踏まえつつドゥロムとデュフレンヌのベルクソン理解を検討することを通じて、この二人がベルクソンの記憶理論から、私の人格的存在そのものであるような潜在的な知の次元を現在から断絶した絶対的過去として特徴づけるという見方を引き出していること、そしてここからレヴィナスは他者から自己への呼びかけを絶対的な過去として特徴づけることによって、現在的な自己意識を中心に据える現象学的思考だけでなく、むしろ自己の存在の場を絶対的過去に見出す生成の哲学を問いただそうとしていることを明らかにした。

(3)後期主著における音声的表現の読解:(1)(2)の考察を深めつつ、「響き」や「こだま」といった音声的表現に着目して『存在の彼方へ』を、そのもととなった先行論文も参照してテキストクリティークを行いながら読解し、存在の開示としての真理から根源的自己性へと遡行する後期レヴィナスの自己論の展開を解析した。その結果、「声」「音」「発話」「呼び声」といった音声的事象をめぐって省察を深めてきたフランス現象学の展開に後期レヴィナスの自己論を素描的に位置づけるとともに、レヴィナスの言う対格の自己が、他者からの呼びかけに対してつねにすでに応答してしまっており、しかもその応答以外の何ものも語ることのない声であることを明らかにし、この成果を『哲学雑誌』に学術論文として発表した。私がつねにすでに呼び声に応答してしまっているということから事後的に、さらに先立って他者から呼びかけられたという出来事が成立するという極めて逆説的な構図をレヴィナスが考えている点を解明したこの成果は、本研究の集大成と言える重要な成果である。

以上が本研究の主たる成果であるが、これらに加えて、日本アンリ哲学会のシンポジウムの提題者として招待された機会を活かして、アンリの自己論とレヴィナスの自己論との関連について、レヴィナスの身体論を、M・アンリの身体論のキーワードである「自己感受」と身体の運動に対する「抵抗」という二点において詳解する作業を行った。その結果、レヴィナスが、アンリ的な「主観的身体」に比すべき身体を考察しつつも、その根本特徴を透明さではなくむしろ重みに見出していることを解明し、提題として口頭発表した。さらに考察を深めた学術論文が『ミシェル・アンリ研究』第14号(2024年7月刊行予定)にて公表される予定である。

また、レヴィナスによる音の経験の分析の射程を論じた既発表論文に加筆修正を施した論文を論文集『個と普遍』にて発表したこと、研究代表者が編著者の一人として公刊したレヴィナス入門書『レヴィナス読本』にてレヴィナスと現象学の関係を総括する論文を公表したこと、レヴィナスに密接に関わるV・ジャンケレヴィッチの形而上学についての研究発表を行ったこと、佐藤義之『レヴィナス「顔」と形而上学のはざまで』(2020)のフランス語書評を国際ジャーナル『レヴィナス研究手帖 *Cahiers d'études lévinassiennes*』に寄稿したことなども本研究の成果の一部である。

以上のように本研究は、国際的かつ多様な形で着実に研究成果を公表することができたと自負している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 平岡紘	4. 巻 137
2. 論文標題 レヴィナスと声の現象学 フランス現象学の側面	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学雑誌	6. 最初と最後の頁 115-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平岡紘	4. 巻 28
2. 論文標題 藤田尚志著『ペルクソン 反時代的哲学』（勁草書房、2022年）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 364-367
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.51086/sfjp.28.0_364	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平岡紘	4. 巻 13
2. 論文標題 服部氏、古荘氏、本間氏の論考へのコメントと質問	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究	6. 最初と最後の頁 57-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20678/henrykenkyu.13.0_57	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平岡紘	4. 巻 14
2. 論文標題 レヴィナスとアンリにおける身体の問題	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平岡紘	4. 巻 4
2. 論文標題 具体的な生、経験、哲学 渡名喜庸哲『レヴィナスの企て』によせて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 レヴィナス研究	6. 最初と最後の頁 39-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平岡紘	4. 巻 38
2. 論文標題 鈴木崇志『フッサールの他者論から倫理学へ』(勁草書房、二〇二一年)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 97-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平岡紘	4. 巻 3
2. 論文標題 レヴィナスと空間の経験	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 レヴィナス研究	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平岡紘	4. 巻 3
2. 論文標題 私 の唯一性 「私」と固有名の関わりから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ひとおもい	6. 最初と最後の頁 64-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroshi HIRAOKA	4. 巻 18
2. 論文標題 Yoshiyuki SATO, Levinas : 《 Kao 》 to Keijijo-gaku no hazama de.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Cahiers d'Etudes Levinassiennes	6. 最初と最後の頁 254-257
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 平岡紘
2. 発表標題 レヴィナスとアンリにおける身体の問題
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会第十五回研究大会シンポジウム「アンリとレヴィナス 『読本』同時刊行を記念して」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 平岡紘
2. 発表標題 ジャンケレヴィッチ『第一哲学』における直観概念
3. 学会等名 哲学会第61回研究発表大会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平岡紘
2. 発表標題 具体的な生、経験、哲学 渡名喜庸哲『レヴィナスの企て』によせて
3. 学会等名 渡名喜庸哲『レヴィナスの企て』合評会(レヴィナス協会主催)(招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 レヴィナス協会、渡名喜 庸哲、藤岡 俊博、石井 雅巳、犬飼 智仁、小手川 正二郎、佐藤 香織、長坂 真澄、服部 敬弘、馬場 智一、平石 晃樹、平岡 紘、村上 暁子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 352
3. 書名 レヴィナス読本	

1. 著者名 杉村 靖彦、渡名喜 庸哲、長坂 真澄、平岡 紘	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 422
3. 書名 個と普遍	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------